



Title	洛星高校プロジェクトに参加して
Author(s)	高木, 遼
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 19-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

洛星高校プロジェクトに 参加して

高木 遼

「洛星高校プロジェクト」という共通の名前を確認しあったその日、研究室に集まったメンバーがまずもって確認したのは、プロジェクトの枠組みだったように思う。手許に残っているメモ書きには次のようにある。「枠組み：洛星高校—教育、哲学は二の次とする」。出発点は他の高校ではなく、ましてや小学校や中学校でもなく、あくまでも洛星高校である、というほどのことだろう。また、誤解を招きやすい言い方かもしれないが、あえて言えば、とりわけ数ある選択授業の中からこの講座にやってきた生徒たちに目を向け、そこから考えはじめよう、ということでもあるだろう。

もちろん、生徒ひとりひとりといえども高校生であり、高校は教育というものと切り離せないのもあって、そうした比較参照点ないし巨視的観点はゆえなきことではない。むしろこの視点があってはじめて、他でもない洛星高校の生徒たちにこそ着目しようとする選択的動機づけは可能

であるだろう。このプロジェクトは、「教育とは」「哲学とは」といった議論を、洛星高校の生徒たちの延長線上に置くことを決意した。それは問題意識を異にする各メンバーの足並みを揃えるためだったのかもしれない。ともあれこのプロジェクトでは、メンバー各自が洛星高校の生徒たちを出発点として、そのうえで思い思い、教育や哲学について再帰的に考えていたのではないかと思う。

本稿では、活動の記録を残すためにも、プロジェクトがそれとして直面した課題や得た気づきについていくつか記述することにしたい。過去の資料が残っていないと後になって困ることがある、活動の記録はできるだけ残しておいたほうがよい、ということ自体、プロジェクトが得た気づきの一つである。とはいえ、プロジェクトを記録するという作業は、各メンバーの相互作用を筆者が再構成することである。そのことにどれだけの意義があるのかは意見の分かれるところだろうが、生徒たちとの対面だけでなく、プロジェクト運営自体にも関心を寄せていた者として、活動の概観を述べることで、執筆の任にこたえたいと思う。

まず焦点となったのは、授業の目標を生徒たちに伝えることについてである。上記のように、洛星高校の生徒た

ちを出発点にすることを確認したうえで、昨年度以前から洛星高校での哲学教育に関わっていたメンバーの意見を参考にしつつ、プロジェクト全体の大きな目標を設定することにした。そこで決まったのは、ひとの意見をよくきき、共に考えながら、「正しい」(いわゆる「教科書的な」あるいは「講師の顔色をうかがった」) 答えを導き出すのではなく、「問い」を自らのものとして引き受ける、というものであった。

プロジェクトの提供する個々の授業は、この目標を実現すべく組織されることになる。例えば、開講当初はききやすく発言しやすい雰囲気づくりを目指して、生徒の反応を見ながら、あだ名をつけたり、フリートークではなくワーク形式にしたり、少人数のグループに分けたり、テーマを身近にしたり、地べたに座ったり、授業中に発言できなかったことを記入できる紙を配布したり。また、進行役は意識的に発言に頷いたり、笑い声を大きくしたり。

しかしそれでも「どういうことをするのか分からない」といった声はある。そうしたとき、授業の意図するところを伝えてもよいのだろうか、それは生徒を誘導し、自発的な意見や考えの可能性を捨ててしまうことになりはしないか。進行役の顔き一つにしてもそ

の問題はついてまわる。とはいえ、投げっぱなしの放任でよいのか、生徒たちのニーズを汲み取っていく必要もあるのではないか。生徒たちは与えられた事態に抗う自由を持たないのか。授業では目標をそのまま伝えてみたこともあったし、ワークの後、授業の最後にその趣旨を説明するレジュメを配って見たこともあった。

次に焦点となったのは、「ひとの意見をよくきく」というプロジェクト目標の意味あいである。生徒たちの発言が次第に増えてくるにしたがって、しかしその一方で、生徒同士の間で質問をしようことがまだまだ少なく、また発言内容の確認をとる問いもあまり行われていないことに気づかれてきた。これに対しては、他者の意見を吟味することを通して考えることをしてほしいといった声があがった。

そこで授業では、意見を比較できる分類ゲームや、一つの意見を吟味できる相互問答法を用いて、意見に意見する事態を積極的に演出するなどしたのであるが、それはとりもなおさず、「きき返す」こともまた「きく」ことの一つであるとの見解をメンバーが暗黙裡に持っていたということへの無自覚的な反応だったとも言えるのではないだろうか。そうだとすれば、プロジェクトはみずからの立てた目標の意味あい

を、生徒たちとの接触を通じて学び直していたのかもしれない。生徒たちという鏡を通じて、プロジェクトは自己を再発見したのかもしれない。



最後に指摘しておきたいのは、こうした課題や気づきをプロジェクトが得られてきたのは、授業計画を立案するミーティングに加えて、それとは別にプロジェクト全体の目標を繰り返し話し合うミーティングを設けるなどした組織運営の方法にも因ってのことだろうという点である。ともあれ、有意義な時間を与えてくれた洛星高校、生徒たち、プロジェクトメンバーの皆さんに感謝したい。

(たかぎ りょう)